

이었다。翌朝錦州に着いて待機場に連れていかれた。コンクリートの倉庫だった。若い者は使役に駆り出されて壺蘆島に連れて行かれ、夜通しドラム缶の荷積み作業をやらされたが、苦にならなかつた。錦州から壺蘆島に移動し、乗船の順番待ちのため数日待機、ようやく七月十四日に引揚船に乗船した。

ちょうど六日間の船上生活、七月二十日大竹港に接岸、DDTの消毒や防疫検査などがあり、その日は収容所に入れられた。大竹駅から懐かしい故郷飯田に向かったのは、七月二十二日の午後であった。

故郷は、心は暖かかった。飯田駅には村の方々や関係者が出迎えてくれた。すぐに兄弟三人、母の生家の北原に帰った。先に帰国していた下の弟と涙の対面をし、その夜は積もり積もった話で夜の更けるのも忘れて語り合った。

昭和十三年三月、一家を挙げて満州へ開拓団員として、大きな夢と希望に胸をふくらませて渡満した五年余のことが、夢のように、また走馬灯の如く頭の中を駆けめぐっていた。朝まで寝ることができず、帰国第

一日の夜が明けた。

それからまた、戦後の開拓生活が始まった。岩手県の本木上郷の開拓に半生を捧げて、本年で五十年を迎えた。

平成六年三月二十八日、長野県飯田市下久堅柿の沢の地に「水曲柳開拓団殉難犠牲者慰霊之碑」が建立され、亡くなられた十四人の方たちの名簿をその中に入れ、永久供養されることになった。今も昨日のこのようにまぶたに浮かぶ。亡くなられた方々の遺言の真実を記すことにより、冥福が祈れると思っている。

私の引揚げ体験記

岩手県 藤澤 正 一

一 渡満の動機

私は、昭和九年に盛岡市に所在する岩手県立盛岡農学校を卒業して、県の職員として平穩な毎日を送っていた。昭和十二年の春に、当時満州国の吉林省農林科

長であった大沼幹三郎氏がこられて、「満州国に農事
合作社を設立したので、その合作社で必要とする業務
指導要員を採用したい。ついてはその採用試験を仙台
市で実施するので、よろしくお願いする」との話であつ
た。

当時私は、岩手県穀物検査員として盛岡市で勤務し
ていたが、長男という立場でもあり、積極的に受験し
ようとする気持ちはなかった。しかし、たまたま職場
の同僚から強い誘いがあり、冷やかし半分の軽い気持
ちで仙台に行き試験を受けた。ところが数日後に、母
校の盛岡農学校に採用通知が届いた。学校では採用の
通知があった以上は、学校の信用問題にもかかわるの
で、是非行ってもらわなければ困るとのことであった。
私としても、渡満せざるをえなくなり、両親に今まで
の経緯を話して、十年間の期限付きで許可を受けた。
ようやくのことで昭和十二年六月に満州に渡った。

吉林省公署農林科で、約二カ月間必要な訓練を受け
て、九月にそれぞれの任地に赴任をした。新任地は、
新京から約一時間ぐらい北に行ったところの徳惠県と

いうところで、満州国が独立するまでは政治的にソ連
の支配下にあつたところである。町並みもきれいで住
み心地のよい小都市であつた。

赴任後、早速に穀物検査員として吉林省内で生産さ
れた穀物類の品質検査などを担当、満州の厳しい一冬
を過ごした。

二 終戦直前、直後の生活状態

昭和十三年の四月、吉林省農林科勤務を拜命した。
思いがけなく吉林省公署に日系満州国官吏となつて勤
務することになった。

吉林省公署に満五年間勤務して、昭和十八年四月に
は、同じ吉林省の樺甸^{カマダ}県の開拓科農産股長として、樺
甸に転動した。職務内容は、農業、畜産など食料関係
の責任者であり、忙しく働いた。このころになると満
州でも主食類は必ずしも潤沢ではなくなつてきたが、
樺甸は満州でも奥地であり食料で困るようなことはな
かつた。

昭和二十年五月、在満日本人の根こそぎ動員があり、
私にも召集令状がきて、間島省間島市に所在する部隊

に入隊した。約一カ月の訓練を受けてから、ソ満国境の山奥に入り陣地構築のための穴掘り作業を毎日続けていた。

昭和二十年八月十五日、わが国の無条件降伏による終戦によって、私たちの部隊は現地で解散することになった。部隊長から「敵に捕まりそうになったときは、手榴弾で自決をするように」と言われ、各自二個ずつの手榴弾を受け取って山を下りた。

あたかも戦国時代の残党の如き心境で、山中をさまよい歩くこと約一週間、ようやく間島市の町外れにたどり着いた。私と一緒に山を下りた連中とはそこで別れて、それぞれ目的とするところに行った。間島市内に入って知人の家に行くつもりで市内を歩き回ったが、どうしても探せずに思案していたところに、日本人の女性と会い、いろいろと話をしているうちに、用心棒としてうちに来ないかということになり、その女性の家に行った。女性の二人暮らしであったので自分そこで居候をすることにした。

一週間ぐらいその家で世話になっていたが、ある日、

新京行きの汽車が出るとの情報があったので、世話になった礼を言ってその家を朝早く出て、間島駅に駆けつけて、ちょうど到着した汽車に飛び乗りどうにか吉林に行くことができた。

吉林に着いたときにはもう夕方で、外は既に薄暗くなっていた。何はともあれ一目散に省公署当時の上司であった滝沢正さんの家に向かった。途中で危ない目にも遭ったが、とにかく一刻も早く滝沢さんの家に行きたかった。

滝沢さんに会って樺甸の様子などを尋ねたところ、滝沢さんは、「それよりも、いま隣組の寄り合いがあって帰ってきたところだが、ソ連軍から、元兵隊であった者は名乗り出るようにとの指示があった。このままここにいるのは危険だから、しばらく身を隠した方がよいのではないか。現在までの情報では、樺甸県の治安は比較的の良いようだから安心しなさい」と言われた。疲れが一度に出たような感じで、その夜は滝沢さんの家に泊めてもらった。

終戦となって山を下り、それから約半月、夢の中の

出来事のように、いま滝沢さんの家で寝ていること自体が、どうしてなのかよく分からないような錯覚を覚えながら、安心して眠ってしまった。

三 満人に助けられて

翌日、朝早く盤石^{バンゼキ}に向かって吉林駅から汽車に乗った。樺甸県は鉄道沿線ではなく、盤石からバスまたはトラックに乗り継がなければいけないような奥地であった。盤石駅に着くやいなや早速に、駅前に駐車していたトラックに便乗しようと交渉していたところ、ちょうどそこに県公署にいた職員の満人がそばに寄ってきて言うには、「樺甸の街には、もう日本人は一人もいない。今は全員八道河子^{ハチドウカシ}の開拓団にいるそうだ」と教えてくれた。

県公署に勤務している日系職員が、非常の場合には八道河子の開拓団に避難するのは考えられることで、満人の職員に厚く礼を言って、また汽車に乗って八道河子駅に向かった。

八道河子開拓団は、駅から約十二キロメートルぐらいのところにあつたので、夜道を歩いていくほか手段

がなく、一人で心細かったが歩くことにした。

途中にすいか畑の見張り小屋を見付けたので、これ幸いとばかりに中に入り、寝ようとして横になったが、うとうととするがすぐに目が覚めてしまう。寒くて眠れそうにもないので暖を取ろうと、小屋の中にあつた枯れ枝を集めて火を付けたところ、急に炎が上がり小屋の屋根に燃え移り、小屋が焼けてしまった。急いでそこを逃げ出したが、幸いに見付からなかった。

寒い夜道をまた歩き出したが、しばらく行くと、道路上でかがり火をたいて夜警をしている集落に行き当たった。そこで、私は事情を話し、かがり火のそばで寝かせてもらったが、その集落の満人は皆よい人で、危害を加える様子もなく安心して休むことができた。

翌朝、早く目が覚めたが、おかげで疲れもとれていた。再び八道河子を目指して歩きはじめた。途中で土民の追剥^{わいはく}に遭い、持っていた荷物はもちろんのこと着ていたオーバーもはぎ取られて裸同然の姿になってしまった。

そんなかっこうで八道河子に向かってさらに歩いて

いたとき、突如、穂先に赤い房をつけた槍で武装した
数人の男が現れて、私を捕まえて有無を言わせず「街
の長」という者のところに連れて行かれた。

その時の「街の長」という者との会話は次のような
ものであった。

「お前は、どこに行くつもりだ。また、以前何をし
ていたのか」

「私は八道河子の開拓団に妻子を探しに行くところ
だ。戦争が終わるまでは樺甸県の県公署の農産股長を
していた」

「農産股長は、悪いことはしていない。むしろ我々
に牛をくれた（前年、熱河省から牛を導入し、育成の
後子牛で返すという条件で樺甸県内の各農家に一頭ず
つ入れたことを指している）良いやつだ。助けてやる
う」

それからは、非常に打ち解けた雰囲気となり、いろ
いろと話し合いをした。その話し合いのなかで「街の
長」は、「八道河子の開拓団の日本人は、三日前に全
部引き払って吉林に向かった。八道河子には日本人は

一人もいない」と言った。八道河子に行く目的がなく
なってしまった。間違いないかと再度聞いたが絶対に
間違いないと言う。

その晩は、「街の長」の家に泊めてもらうことにし
た。

同じ満人でも話が分かれれば、お互いの立場を理解し
合うことができ、敵対視することはなくなるとい
うことをしみじみと感じたものである。

「街の長」は、私が土民の追剝に遭って身ぐるみは
がされたことについて非常に同情してくれた。翌朝、
「街の長」の家から八道河子駅に引き返すとき、ポロ
ではあったが着物をもらい、さらに腹が空いたら包米
（とうもろこし）を食べたらよいと言ってマッチ一箱
と饑別として十円をもらった。このことは大変に有り
難いことであったし、その後の道中で大助かりであっ
た。

途中で、包米畑に入り包米を焼いて食べたりにして、
夕方になって八道河子駅に着いた。吉林までの乗車券
を買おうとしたが金が無く、致し方なく、それまで大

切に隠して持っていた時計を駅員に質入れのようになかった。こうで乗車券と交換して、汽車に乗った。

やっと吉林に舞い戻ったが、吉林市内には戒厳令がしかれていることが分かり、吉林駅の一つ手前の駅で降りた。夜が更けていたので駅の近くにあった交番に飛び込んだ。満系の巡査がいたので訳を話したところ、理解のある警察官で交番の事務所で一晚泊してもらった。

翌朝、吉林市内の滝沢さんの家に行ったら、妻と子供がいてお互いの無事を喜び合い涙で抱き合った。

こうして、この混乱の中で、幸いにして家族が一緒になることができた。

四 引き揚げまでの労苦の状況

それから翌年の四月に官舎の立ち退きをいわれるまで、約八カ月の長きにわたっての吉林での避難生活が始まった。この長い間、滝沢さんには終始お世話になり、私たちが生きて祖国日本に引き揚げてこられたのも滝沢さんのおかげである。

吉林での生活が始まったのが九月末ごろであったの

で、すぐに冬籠もりの準備をしなければならなかった。まず最初に吉林駅に行って石炭の燃えかすのボックスを拾う仕事であるが、大勢の避難生活者が同じように拾いに行くのでバケツ一杯集めるにも大変な努力を必要とした。次に、食べることである。一冬を食いつなぐためのかぼちゃなどの確保に苦勞をした。それから現金である。現金があれば真冬になっても食糧を買うことができるので、現金を得るための商売をした。現金収入の手取り早い方法は、貴金属の売買で、吉林駅前の広場などで買ったたり売ったりして差額を儲けた。こんなことをして引き揚げるまでなんとか食いつなぐことができたのも、吉林は他の都市と比べて治安状態が随分とよかったことと、私は、省公署で勤務していたときも、県公署で仕事をしていたときも、何ら悪いこともしてないし、また現地の人をいじめたりなどもしていないので、安心して商売に打ち込めたからである。

五 引き揚げの喜び

昭和二十一年四月に、滝沢さんの官舎を立ち退いて

からは、農事合作社吉林省連合会の菅原さんの家に、同県人のよしみで転がり込み、九月の引揚げまで同居させてもらった。私たち一家は、幸運にも引揚げ開始第一陣で吉林を離れることとなった。

九月一日吉林駅を出発して錦^{チンケン}県に向かった。吉林駅から乗った汽車は、貨物列車でしかもそのなかの無蓋車であった。進行方向に向かって左側の角に、むしろを張り巡らした便所があるという貨車であった。それでも、日本に帰れるというので喜び勇んで乗り込んだときのこと、いまでも生々しく思い浮かぶ。

新京・奉天を経由して錦県に行き、そこから帰国船に乗って博多港に上陸するという引揚げ計画であった。私は、本部との連絡業務を担当するために小隊長を命ぜられた。

吉林を出発した引揚列車は、途中で何回となく停車し、その度に機関士に、お金とか腕時計とかを手渡してどうにか奉天駅まで来た。奉天まで二日ぐらいかかったと記憶している。奉天駅に着いたが、ホームには入らずに引込線に入れられて下車させられた。

全員、工場の冷え込んだコンクリートの土間に収容された。本部からの連絡によると、列車のなかで死亡者が出たため、その死亡者を検死したところコレラによる死亡と分かり、そのための拘留であった。

その後、コレラ患者の発生は無かったが、貨車の都合もあって、この工場の土間で約一カ月ほど待機生活をした。この間の食事は三食ともコウリャンであったので、皆の体力は極度に落ちて衰弱がひどかった。ここで栄養失調で死んだ人も大分あったが、どうにもできなかつた。

やつとのこと瀕死の状態で錦県にたどり着いたが、これで本当に日本に帰れるという希望が沸き上がり、元気が出てきたようだった。

私たちの乗る引揚船は、物資輸送に使われているわが海軍の軍艦であったので、食事は白米のご飯を食べさせてもらい、そのうえ艦内で慰安会などを催すなど、いろいろと気をつかってくれた。しかし私は、奉天での一カ月にわたる過酷な生活のために体力が極端に消耗しており、慰安会にも出る気分がなく終始寝ていた。

三昼夜ぐらゐの航海でやっと博多港に着き、懐かしい博多の夜景などを眺めて、日本に帰った実感を味わっていたが、検疫などのために艦内で三日ぐらゐ留め置かれてしまった。

博多港に留め置かれてから四日目の夕方になって、やっとのことで下船となった。引揚者用の宿舎に一泊して、翌日の朝、引揚げ団の解散となり博多駅に向かった。

途中で見た福岡・博多の市内の様子や行き合った人々の変わり果てた姿には、ただただ目を見張るのみだった。我々だけが苦労していると思っていたが、日本内地にいた人々も戦争の悲惨な目に遭っていたのだと改めて考え同情をしたものだった。

博多駅から上野に向けて出発したが、途中のことは格別に記憶に残っていることは何もない。多分、日本の土を踏んだ安心感と今までの疲労感で、虚脱状態になっていたのだらうと思っている。

翌日の夕方に無事上野駅に着いた。上野駅から眺めたところ、東京湾まで一望することができたのには驚

くのみであった。上野駅のベンチで一夜を明かして、翌早朝の汽車で故郷の懐かしき盛岡を目指して出発した。

盛岡駅の一つ手前の仙北駅で下車した。その辺りの様子は昔と変わらなかった。懐かしさでいっぱいだった。

約四キロメートルの道のりを大きな荷物を背負い、子供の手を引いて、約二カ月にならんとする大旅行で疲れ切った体に鞭打って歩いた。しかし家が近くなってくるに従って、足の運びも段々と早くなってきた。

その夜、無事に我が家に帰り着いた。

安心したせいもあったのか、数日したら体に変調をきたして急に高熱を発して寝ついてしまったが、診断した医者には、発疹チフスの疑いがあったと言った。びっくりして即時、岩手病院に入院したが、日ごとに快方に向かい約一カ月後には無事に退院した。栄養失調による発熱だったということの後で聞いた。

その後、しばらくの間、家族ともども実家の世話になり、体力・気力の回復を図った。

六 生活安定への努力

昭和二十二年六月、先輩・友人の力添えで、岩手県の農林技手に採用されて、県庁の農地課に勤務することができた。

思い起こせば、昭和十二年に農事合作社に採用されて、両親を説得して十年間の許可をもらって渡満してから、約束どおり十年目に郷里で農政関係の仕事に従事することになった。しかし、この十年間の満州での経験は、私にとってまたと得られない貴重な経験であり悔いのない人生のひとつまでであった。

「ここは御国に何百里、離れて遠き満州の、赤い夕日に照らされて……」の満州の地において、志半ばに倒れ非業の死を遂げられた人々のご冥福を祈ってやまないものである。

私の半生流転の記

宮城県 高橋 武

北満州国三江省樺川県佳木斯^{ソウモース}、野戦郵便局気付、永豊鎮屯墾軍第一大隊第二中隊宮城小隊長というあて名に、私は限らないあこがれを抱いていた。農業には全然縁もない私は、北海道で牧場経営をする知人のもとに渡道するつもりでいたが、にわかには満州移住に変えた。いとこの安藤さんに度々連絡していたが、危険だからしばらく様子を見るので、待つように言われた。折しも家族招致の代表、森合宮城小隊長が隊員二人と帰省中で、県庁にて面接を受け、強く渡満の意思を述べた。森合小隊長も納得、了解をされて、いとこの花嫁と他の人々より二日遅れて敦賀に向かって郷里をたった。

敦賀では、各県代表の花嫁さん、宮城小隊の花嫁たち数百人が集合し、天草丸にて清津^{セイシン}及び函門^{トモン}を経由し